

## 永続につながるストーリーが生まれる家

加古 俊彦  
(笑恵館クラブ)



笑恵館を一言で表すと、住み開き、多世代型シェアハウス、みんなの家...

何かしらのカテゴライズは可能だが、一言で理解いただいた試しがない。笑恵館での活動を知っていただくには、予定表を見ていただければ十分理解いただけると思う。( <http://shokeikan.com/> ) 住み開かれた家らしく、多種多様の教室、イベントなどが開かれている。コロナ禍の影響ももちろん受けており、少人数、感染対策を行った上で実施していることはここに付け加えたい。

当活動報告をするにあたって筆者は、「笑恵館とは」について再度考える良い機会ととらえ、単なる活動報告にしないという条件で執筆を引き受けた。笑恵館のようなコミュニティスペースの活動報告はどうしても似たようなイベントが並び、既視感の強いものになりがちである。そこで、笑恵館らしく関係者の体験ストーリーで活動報告することを思いついた。その方が学術誌の一記事として、読者の参考になることもあるのではと考えた。

笑恵館には語るべきストーリーがたくさんある。ストーリーの宝庫と言っても過言ではない。オーナーの田名さんがなぜ笑恵館を始めたのかから始まり、死を意識し最後に笑恵館にたどり着いた若者が住処を与えられ、仕事を持ち、恋愛し、結婚し、子どもが生まれ、巣立っていったことなど、詳しくはプライバシーの問題で公に語ることのできないストーリーまである。

笑恵館を理解する上で最も重要なことは、「永続性」を目的としていることである。オーナーが不在となることで、たちまち立ち行かなくなる施設が多い中、そうなることを前提と

し、笑恵館を永続的に運営することに目的を置いているのである。10年20年といった短いサイクルではなく数百年継続していくにはどうしたら良いのかを設計思想としている。笑恵館というコミュニティやその思想が永続的に受け継がれていくことに意味があり、そこに人が存在することでストーリーが生まれ、そのストーリーで人は笑恵館を理解するのではないかと考えられる。

笑恵館を語る上でまずオーナーである田名夢子さんのストーリーを語るべきであろう。以下は笑恵館のホームページにも掲載されている田名さんの想いだ。

---

私の願いは、めったに会わない身内よりも、気心の知れた近所の他人とお付き合いしながら、住み慣れたまちで人生を全うすることです。

しかし老朽化した家のままでは不安があり、改築を考えても資金など難しい問題が沢山あります。この課題解決のために、数年前から様々な高齢者施設などを調べ、見学してきました。安心して看取ってもらうために、医師または看護師、介護士に常駐してもらえないかと考えましたが、医療・福祉関連に関わるのは非常に難しいです。

でも最近では、終末期においても在宅ケアが推進され、最期まで自宅での訪問診療、訪問看護、訪問介護が充実しつつあります。そのことを意識した間取りなどを考えれば、心配なく自宅で終末期を迎えることが出来るはずです。そこで、これまで私の住まいであった母屋を、アパートの住民だけでなく地域の皆様にも思い切って開放し、誰もが気軽に出入りできる「みんなの家」にできないか。そしてわが家を活用してくださる皆さんとともに、私自身も生き生きと暮らしたいと考えました。

我家は親の代から100坪余の敷地内に、自宅と6世帯のアパートがあり、家族を含めいつも10人余が暮していました。そこで、新たな住まいでも、家族2人と共に、一人暮らしの高齢者や、一人で仕事と子育てを頑張っているシングルマザー、共同生活に関心のある若者など、10人程が共に生活できるアパートと、地域の方々にも利用して頂ける食堂、そして子育てサロンやミニデイサービスなどのできる集会室を作り、ここに集うすべての人たちと緩やかな家族になりたいと考えました。

上記の願いが実現するなら過密都市での住宅不足や空き家利用の問題、一人住いの不安、そして終末期在宅ケアの推進などが一挙に解決される一例になるのではないのでしょうか。そしてこの願いが実現したなら、土地や建物を子供に相続するのではなく、私の後もそのまま利用、活用して頂けるようにしたいと思っています。

「笑恵館」とは、「笑いの絶えない恵みに満ちた家」、「人生終わりよければ全て良しとなる家」です。

私と同じようにお考えの方も大勢いらっしゃると思いますが、はじめの一步踏み出すのは大変です。笑恵館はそんな皆様の疑問に答え、新たな一步のきっかけになれば幸いです。

---



以下は、笑恵館に関わる有志が集い、心理的安全性を確保した上で、笑恵館での自らの体験ストーリーを語った記録である。コミュニティ活動の裏では関わる人全てに関係性があり感情が動き、それがストーリーにつながっている。その各人の体験したストーリーに焦点を当てお伝えすることで、より良い地域コミュニティの構築を希求される方々の参考に少しでも貢献できれば幸いだ。（以下に登場する松村、小塚、加古は笑恵館の運営スタッフ）

#### 田名夢子さん（笑恵館オーナー、70代、女性）

笑恵館を始める際に予約台帳としてノートを買いました。でも、不要でした。松村さんや関わってくださる方々が、あっという間に予約システムをつくってくれました。これには驚いた。オーナーとしてここを始める上で、あれもこれも自分でやらなければならない、大変だぞ、と思っていたことを周りの人がやってくれる。これは、できる人に任せるべきだと思いました。

（任せることの究極が、笑恵館を開けたまま、田名さんは世界一周のクルーズ旅行に行きましたからね。笑）

その節はありがとうございました（笑）。

あれはできないの？これはできないの？皆さんが、いろいろ言うてくださるわけですよ。始めは、そんなことするの？と思っていました。でも、やれないことはないし、やりたい方がいるのであれば、じゃあどうぞ、どうぞ、と言う感じで、今の形になりました。あそこの棚のレンタルもその一例です。棚を借りて飾りたいという人なんているのかなと思ったけど、結構います。結局やってみないと本当にわからない。

オープンの2年前、確か2010年の11月から、奥のアパートでミニデイと子育てサロンを開始しました。笑恵館のオープンが2014年の春ですから、2、3年先に始めていたことがこの下地になっています。その当時は、庭の木々がうっそうとしていて、奥で何をやっているかはよくわからない状態でした。ところが、子育てサロンのときは通路にベビーカーがズラッと並んで、終わったら押しながら帰られる。ミニデイのときは、「楽しかったね」なんてお喋りしながら帰られる。その雰囲気近隣の方々に「何か楽しいことやっているなぁ」と伝わって、少しずつ理解されたのでは、と思います。

場を開くと、人が集まる、人が集まると出会いがあって、そこから様々なことが始まる、やってくれる。そんな体験がずっと続いています。

おかげさまで脳の活性化が順調にしております（笑）。始める前はなかなか人の名前を覚えられなかったり、思い出せなかったりしたのが、この頃、覚えるのが早くなってきたなと感じています。7年になりますが、オープンしたときよりも気持ちも若返っていると感じます。本当に皆さんのおかげです。本当にありがとうございます。



大山さん（仮名、笑恵館利用者、70代、女性）

私は、笑恵館のオープンセレモニーの時に区長さんがいらっしゃるということで知人におもしろそうなころが出来たから見に行かないって誘われて来たのがきっかけです。実はその時は、何がおもしろいかあまりわからなかった（笑）。

その次の年夏になぜか松村さんに捕まって、「大山さんの家の周りに空き家はないの？第2、第3の笑恵館を作ろうかと思って」と言われました。当時、周りに空き家が4、5軒あったので、借りられるか聞いてみたらいろいろな理由でだめでした。そこで松村さんは、「大山さんの家は広いけど、全部使っているの？」って聞かれました。確かに全て使っているわけではなく、一階はほとんど使っていなかった。子どもが荷物を置きっぱなしにしているくらいでした。「じゃあ、そこをオープンしましょう」という話になった。長男に相談したら「日本土地資源協会とか怪しくない？」と言われちゃいました（笑）。

笑恵館クラブのメンバーの皆さんにも片付けを手伝ってもらって、その間にプランを立てて、壁を取って2つの部屋を1つにして準備しました。自宅を開いて何するかというプランは田名さんよりも更になかった（笑）。ただ、お茶をしたり、何かしたりしようということになりました。ボランティア組織としてママ友を中心とした人も集まりました。

その後、笑恵館に出入りするようになり、1番驚いたことがあります。それは、自宅のオープニングに何をするかという話の時に、「じゃあ、旦那さんがインシュタインに会ったときの話でいいじゃないですか」と提案されたことです。それって旦那の自慢話なのです。誰も興味がないのでは？と半信半疑でチラシを配ったら、近所の人がすごく喜んじゃって、インシュタインに会った人が近所にいるんだ、ということで（笑）。それでオープンの日には60人以上がその狭い空間に集まったのです。

改めてそんなアイデアが、ぱぱぱっと出てくる笑恵館はすごいなと思いました。それから5年が経ちました。本当に笑恵館で出会った方々にどれほど助けられているか分かりません。本当に感謝しています。おかげさまで元気に外出できています。

小西さん（仮名、笑恵館住人、60代、女性）

私は田名さんの10歳年下なのですが、中高短大が同じで、学校の後輩で50年以上、お付き合いいただいています。ある時、ばったり会って、「息子さん結婚して独りなのでしょう。一

部屋空いているけどどう？」と声をかけてもらいました。最初は自宅もあるのでどうかなどは思ったのですが、何か勢いもあり、結局、そこを賃貸にして笑恵館のお部屋を借りることになりました。友達に「田名さんのアパートに住むことになった」と言うと「なんで？」とみんなに言われました（笑）。その際も松村さんや小坏さんにもお世話になりました。

そして、この10月から、まさか83歳の従姉妹まで笑恵館に住むことになるとは夢にも思いませんでした。以前に従姉妹の息子に笑恵館のことを話しました。面白いところに住んでいると言った話から盛り上がり、ついには「お母ちゃん1人だからそこに住まわせるわ」となって（笑）。

そして、その従姉妹の息子達が、笑恵館のホームページを見て、田名さんの「遠くの親戚より、近くの他人。近くにいる他人同士がちゃんと助け合って生きていける地域を私が大事にしたい」の部分にいたく感銘を受けていました。それでも正直、80歳以上の従姉妹が大阪からいきなり上京して、アパート借りるといのは難しいのかなと思いました。そうしたら、「息子が言うなら行くわ」という踏み込むパワーも凄いいし、住人食事会で本人は入院していて息子達が参加したのですが住人の方々のおかげで、結局1回も下見することなく入居しました。

引っ越した時に、住人の皆さんには近所の親戚のおじさんのように接していただいて、田名さんも松村さんも「おお、ようこそ」みたいな感じでありがたかったです。もう息子達は知っているの、「あっ、うちの母ちゃんがお世話になります」と言った感じでとてもスムーズでした。本人も一度も会ったことがないのにすごく親しくしてもらって、大山さんのことも話していて知っているの、とても不思議と言うか、息子達とも本当におもしろいね、という話になりました。

やはり、田名さんの「地域こそやはり、宝ではないか」という想いが素晴らしいです。更に私が何年も住んでいる、だからそれは嘘じゃないんだ、って。また、「ゆるい感じも、住んでいる人をみんな知っているというのも良いよね」って。寒いのがちょっとアレですけど（笑）。でも、従姉妹の住む2階は暖かいようで良かったです（笑）。従姉妹もここにいらっしゃる皆さんに支えていただいて、私一人では、こういうおもしろいことができるとは思えない。身内としても感謝しております。自分自身もおもしろいなと思っています。学校の先輩後輩というつながりがこんな風になるとは。本当におもしろい出会いに感謝しています。これからもよろしくお願いします



平田さん（仮名、笑恵館住人、80代、女性）

その従姉妹でございます（笑）。笑恵館を知ったのは、息子が、従姉妹の小西ちゃんと電話で話した次の日の朝に電話で「小西ちゃんがね、こういうところに住んでいて、良いらしいで」って興奮状態で話すものですから、「あなた朝から呑んでるの？」って聞きました（笑）。それでも熱心に、「母さん、ぜひ一度見においで、お試しできるんだって」と言うのでもう1回「本当にね、酔うてるの？」と聞いてしまいました（笑）。

（息子達は、自分の近くに呼びたかったんですよ。でもなかなか良い場所もないし。どうすれば良いのかという忸怩たる思いもあったのだと思います。）

はい、実は息子の話を聞きながら、「これはチャンスかな」と思いました。長男が世田谷で、次男が藤沢。息子も言っていました、小田急線でつながっている。しかも従姉妹も同じアパートに住んでいる。もうこれ以上の良いところはないよねと。

どうしようかと考えている間に入院することになり、見学を兼ねた住人食事会にも来られなくなってしまいました。それでも上京することに決めました。83歳で大阪から上京することを友達みんながびっくりしています。

（手紙も一杯着ていますものね）

それも驚きました。引越しの挨拶状に「年賀状はこれからやめます」と一言添えて出しました。そうしたら、ほとんどメールで返ってくるかなと思っていたら、結構封書とはがきが着て、友達の心持ちの熱いのに、びっくりしております。

笑恵館に住んでみてとっても良いなと思ったのが、子供の声、人の声がいつもすることで。というのは、引っ越してくる前は、ここと同じような住宅街に住んでいました。でも、

そこは、普段みんな何をしているのだろう、と思うぐらい静まりかえっていました。私は庭いじりが好きで、庭に出ても誰も通らない、声もしない。ここへ来て、息子達も言っていました、驚いたのは子どもの声がある、大人の声がある、それがとっても良いなと思っています。他にもたくさん良いことがあるけど、これぐらいにしておきます。大変楽しんでおります。本当にお世話になり、ありがとうございます。



黒田さん（仮名、利用者、40代、女性）

私は笑恵館に来るようになってちょうど1年になります。娘のことで悩んでいる時に 大山さん経由でここを知って、そして田名さんのやっている子育て支援サービスを経て通うようになりました。笑恵館にもたまに来るし、田名さんは月に2回家に来てくださるし、という感じで1年が経ちました。はじめのうちは笑恵館に来て喋ることもやることもないし、という感じだったのですが、食事会に出るようになって楽しめるようになってきました。

私は、中学生の時にバブルがはじけて、高校生の時にリストラなんて言葉が多く聞かれるような時期に育ち、そういう意味では元気な大人をあまり見ていない世代で、私も保守的な大人になりました。でもここに来たら、何それ？えっ？みたいな感じなのです（笑）。すごく元気な親世代がいっぱいて、「何ここ、すごくおもしろい」となりました。

笑恵館では、色々なアイデアは出てくるし、こんなことやってみたい、あんなことやってみたいというのを実行しています。そんなこと出来ないよ、ではなくとりあえずやってみる、という方々ばかりで、通えば通うほど、自分も元気になれるし、すごいなと思いますし、私もこうありたいなとも思います。

多くの方が、年を取って、老人ホームに入って、人生を終えると考えていると思います。ここではそうではなく、自分達はこういう風に歳を重ねて、最期はこういう風に逝きたいの



よ、と考えている人が多いです。それを言葉にして、みんなで話し合っているというのは、他では出会ったことがありません。私は会計事務所に勤めているので、相続だ、老後の話だとなるのですが、こんな柔軟な話ができるのは、本当にごくごく一部の方だけです。そんな中で笑恵館に来られる方はいろんなことを考えて、夢があって、やってみようと思われている。そういう意味でも通えば通うほどおもしろく、興味深いところだし、エネルギーをもらっています。今いる中では私が一番若いのだから、もっと元気にならなきゃと思います（笑）。

（まあ、他の方々がすごすぎるんですよ、笑）

（最高齢の方の半分以下なんだから、笑）

悲しいのは、皆さんのお葬式に全部でなければならぬことですね（笑）みんなとお別れするのだと思うと（笑）。

（順番があるんだから良いことなの、笑）

（お葬式をどうやって盛り上げるか考えましょう、笑）

大島さん（仮名、笑恵館住人、70代、男性）

この冬で笑恵館での3度目のクリスマスになります。世田谷にもう40年以上ずっと住んでいるわけです。家を買ってローンを払い続けるという選択を僕たち夫婦はせずに、賃貸のアパートやマンションでずっと暮らしてきました。ところが、妻が想定外の癌で4年半前に亡くなって、えらい困りました。

田名さんとの出会いは、福祉系の方々が集まってフリーで話し合う会があり、そこに通っていました。ある時、終活の話をするというので、その場所が笑恵館だったんです。そんなところがあるんだ、じゃあ、僕も行くと言ったら、そこのオーナーはこの人です、となって隣にいたのが田名さんです（笑）。

本当に不思議な出会いでした。それが3年前の12月だったかと思います。すぐ翌日に訪ねてきて、松村さんがそこにいたんですね。住みたいんですけど言ったら、ああ、空いてますよ、となった。その勢いで部屋も見せてもらって、入居をお願いしました。その後、紆余曲折ありましたが、笑恵館に住むことができました。

笑恵館の特長は、一定の歳をとって、独居だとアパートを借りるにも審査があってはねられてしまう。大家さんがOKしないことが多い。直前にいたマンションもやはり、余分に保険を掛けさせられます。笑恵館にはそういうことが、全く無い。前のマンションが、そろそろ更新だなという時に、田名さんに出会った。まあ、運が良かったというか、それで来てみると部屋がえらい寒いんだなこれが（笑）。

（お気持ちわかります、笑）

でも、それも二冬超えて、ウォシュレットにさせていただいて、トイレが温かくなった（笑）。

この冬からはサンタクロースとしての人生も始まりました。子ども食堂に来る子たちにサンタクロースの格好をして、プレゼントを渡したら、とても喜んでくれました。今は、エッセンシャルドライバーもしています。歌うドライバーとして週2日頑張っています。

妻が亡くなってから体重が10キロ以上落ちたんですが、今は戻っています。その時は、追っかけ自殺をするかもしれないという、危険水域だったようです。そんな僕が5年も生きるとも思っていなかった。いろんな人が声をかけてくれて、様々なことをやり始めて、今年サンタクロースができたのは本当にやりたかったことなので、とっても良かったです。ありがとうございます。

（とっても似合っていて、良かったですよ。ある男の子はサンタクロースを見て、呆然としましたからね、本物がいるって、笑）